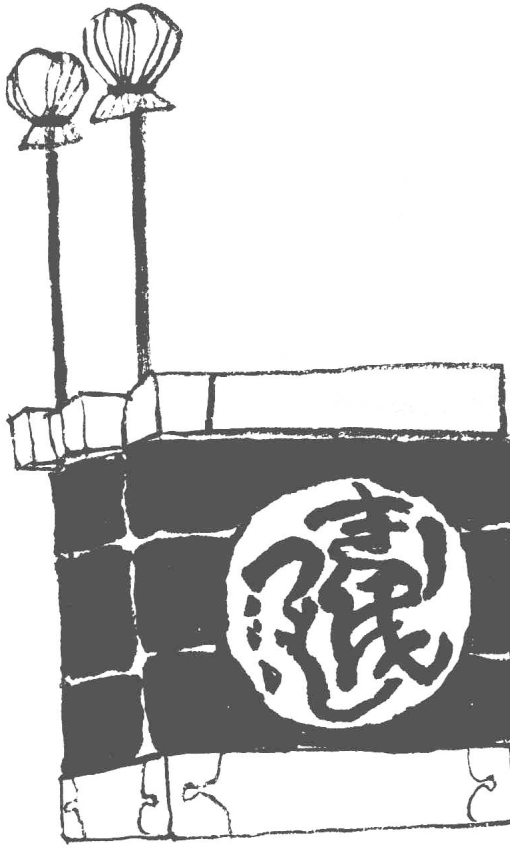
傾く滝

杉本苑子

傾く滝

本苑子



講談社版

傾く滝

昭和四十四年二月八日　第一刷発行

著　者　杉本苑子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二一一二一一一二

郵便番号　一一一二

電話　東京(942)一一一一(大代表)

振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　山見製本株式会社

定　価　四九〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© 杉本苑子　昭和四四年

Printed in Japan

傾く滝

裝幀

御

正

伸

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

一の一

鍋やきうどんの土鍋は、駒三の顔の倍もあった。ふちには汁が焦げてこびりつき、熱々の蓋はやけに重い。落とすまいとして、細っこい腕に力をこめてあけるとたんに、うまそうな汁の香が渦まく湯気にまじって威勢よく立ちのぼり、少年の胃ぶくろはグググと鳴る。駒三自身にかわって、胃ぶくろがまず、歓喜の叫びをあげるのだ。

塗り箸を口に咥え、彼はちょっとのま、うれしさを噛みしめるように目をとじる……。それから食べだす。無我夢中ですすりこむ。鼻めどがいらちぎ息が荒らくなる。

（せくなよ、おい。せっかくの味がわからないじゃないか）

毎度、自分に言いきかせるのだがむだだった。みるみる半分ほど鍋の中身を減らしてはじめて、少年は人心地をとりもどし、おもむろにあたりを見廻すのである。

親方の足を一刻ほど揉むと、駄賃に一文くれる。それを巾着の底にためておいて、三十二文になるといなや翁庵へとんでくるのだ。

永代の南の橋詰めにあるこの古ぼけたそば屋は、老人夫婦が経営していて、味かげんの下手さで評判だった。口のおごった芝居者になど、したがってこの店なら、めったに出くわす気づかいはない。駒三にはそれがありがたかった。

年中すきっぱなしの彼の腹は「まずい」とはどういうことか、さっぱり理解できなかったし、たとえ自腹で食べる夜食であっても、十二にしかならない追い使い同然の小僧では、翁庵特製の鍋やきを抱えこんでいる図など、仲間に見られたくはないのである。ぜいたく沙汰だと非難されるにきまっている。

たしかに、もりかけなら十六文でらちのあくところを、回数をへらしてもいざ食べるとなったら、しんそこ、満足できるものを食べようとする貧乏育ちには似合わない性格が駒三にはあり、この気の強さのために、

「憎いながきだ」

と、親方の家でも楽屋でも、とかく可愛がられない損な日常だったのだ。

もっとも親方の足揉みといったところで、毎晩仰せつけられるわけではない。市村座の火縄売りをしている母親が、あまりにも餓え疲れた様子をしている時も、つい見かねて、

「餅でも買いなよ、母ちゃん」

せっかくためた十文、二十文を渡してしまう場合があるから、鍋やきを気ばったにしろ駒三にとって、それはたかだかひと月、時によってはふた月に一度の、ささやかな奢

りにすぎないのである。
翁庵の嘉助じいさんは、そんな事情をよく知っていた。知っていて知らん顔をしているかわりには、駒三の鍋の中身を多くする。うどん玉は二つ入れるし、かまぼこも思いきり厚く切った。小指ほどな芝えびの天ぷらではあっても、一つのところを二つ張り込んでやっている。他の店との比較を知らない駒三は、上鍋やきとはこういうものだと思っている。ひと言の礼も、したがって言ったためしはない。じいさんのほうもそれが看板の、無愛想なしかめつらを湯気の向うに霞ませているだけである。もっともじいさんにすれば、子供とはいえ駒三は、自分の店の品物に全身全霊をあげての感動を示してくれるたった一人の、貴重な客であったかもしれない。

昼間のうち吹きまくっていた木枯が、気味のわるいほどヒタとやんで、そのかわり骨の髄まできしみそうな凍てついた夜になった。
翁庵にはめずらしくこの日、駒三のほかに二組の客がいい、めいめい蒸籠を二、三枚ずつ前にひかえて陽気に飲んでいた。駒三の存在になど注意を払う者はいないし、いまや食べるのに一心不乱な駒三のほうも、唄おうとわめこうと、いっさい彼らに無関心だった。
天保三年が、あと十日ほどで暮れようとしている節季師走の、時刻は亥の刻――。大川端に面した片側町はほとんど表戸をとざし、灯がもれているのは翁庵だけである。

……と、このとき、油障子がふいに開いて、男物の帯、着物、大小をかかえた小さな女の子が一人、押し入れられるように土間へはいって来た。
「いいね、このお店から出てはいけないよ」
うしろで男の声がし、すぐ障子がしまって、そのままそくさと走り去る足音が聞こえた。
すすぼけた八間行燈の明りに湯気がからまって土間はうすぐらく、酔っぱらいの濁みた唄声で喧騒をきわめている。外の声は調理場まで聞こえず、嘉助夫婦は女の子の出現にすら気づいていなかった。出入り口に近かく腰かけていた駒三だけが、ひょいと目をあげて女の子を見、ばかにでもなったように箸をうごかすのをやめてしまった。
四ツか、せいぜい五ツだろうか。おたばこ盆に結った髪には、ひと粒鹿の子の紅い布がかかり、山繭ではあるが冴えた紫の、小ざっぱりした袷に、麻の葉もようの帯をその子はしめている。縦よりも横に長いと言いたいほど寸のつまった輪郭の中で、きっと引きしめたおちょぼ口がなんとも愛らしかった。
駒三の口もとに微笑がこみあげてきた。
「こっちへ来たらどうだい？　どうせ床几があいているんじゃねえか」
声をかけたが、聞こえなかったのか、女の子は知らん顔をしている。
「腰かけろってばさ。強情っぱり！」
袂をつかんでひっぱると、女の子は危っかしくよろけ

た。手さぐりで飯台のきわを廻り、ま向いの床几に腰をおろす動作の、あやつり人形に似たぎごちなさと、痛々しく宙にすわった視線とで、駒三ははっとさとった。
「おめえ、目が見えねえのか？」
女の子はうなずいた。全身が、いきなり少年は熱くなった。
「ごめんよ。知らなかったんだ。邪見にしてわるかったな」
そして、上目づかいに相手の表情をうかがいながら、
「家、遠いの？」
と訊いた。
「じきよ。あたいのお家、今川町だもの」
「ふうん。……今、外にいたのは父ちゃんかい？」
「お兄ちゃん」
さんざんためらったあげく、絶壁をとびおりるほどの決意で土鍋のフタに駒三はかまぼこをのせ、女の子の前へ押しやった。
「食えよ」
相手は前を向いたきりである。見えないのだ、と気づき、
「かまぼこだよ。うめえぜ」
ふたのはじをつまんで、飯台にこつんと打ちつけた。
「いらない」
そっけなく女の子は拒絶した。
「どうしてさ。おれ、いつもこいつはお楽しみにとっといて、一番あとに食うんだけど、今夜はがまんしておめえにやるよ」
「いらない。たべたくない」
「けッ」
駒三はのどを鳴らした。
「お高くとまってらあ。なら、むりにとは言わねえや。おれが食っちまうだけさ」
むしゃむしゃやりかけたとき、嘉助の妻のお関ばあさんがやっと女の子を見つけて、
「どこの子だい？　駒坊のつれかい？」
泳ぐように寄って来た。
「知らねえよ。どこかの人が今、土間へ押し込んで行ったんだよ」
「冗談じゃない。それじゃ捨て子じゃないか」
かかえている衣類と女の子の顔を見くらべて、お関ばあさんは金切り声をあげた。
「身投げですよおじいさん。身投げの親が子供を店へ置きざりにしてゆきましたよっ」
「なんだ、身投げだあ？」
酔客たちは総立ちとなり、菜箸片手に、じいさんも板場からのめり出てきた。
「押しつまってくるとこういう捨て子が、大川端にはたまにあるんですよ。縁起でもない」
大仰なばあさんの嗟嘆を抑えつけるいきおいで、このとき、女の子の声がひびいた。
「ちがうよっ、兄ちゃんは身投げじゃない。川へ落ちた子

供を、助けに行ったのよ」
店の中はしんとなったが、つぎの瞬間、
「行ってみろっ」
床几を蹴倒して客も嘉助夫婦も、われがちに往来へとび出していった。
「やじ馬だなあ、どいつもこいつも……」
鍋の汁にそば湯をそそぎこみ、大切に大切にすすりながら、
「子供が落ちたって言うけどさ、こんな夜ふけに、外をほっつき歩いている子供なんているかな。おめえの兄さん、河童かカワウソに化かされたんじゃねえのか」
駒三は嘲弄した。女の子の下ぶくれの頬が、ますますふくらんだ。
「夜ふけだからって、どの子もお家にいるとはかぎらないわ。あんたもあたいも子供だけど、こうしておそば屋さんに来てるじゃないの」
一本やられたわけである。駒三はてれ、そばつゆの最後のひと口を、わざと音たててすすりこんだ。ところへ連中がどやどやもどって来た。
「奥がいい。私らが寝場所に使っている小部屋を、いま片づけますからね」
喋りたてるばあさんのあとに、下帯ひとつの若い浪人者が、子供を横だきにしてつづいている。男の子だ。意識を失っているらしい。
（あれ、あの子、うちの若親方じゃねえか？）
その横顔を一瞥したせつな、駒三の顔色はかすかに変った。
（まちがいない。若親方だ！　……でも、なぜ今じぶん若親方が川へなんぞ……。なぜだ？）
慄えが這い上ってきた。歯を鳴らし、飯台の角をかたくつかんで駒三は立ちあがった。
（とにかく逃げ出さなければ……。こんなところにぐずぐずしてて、かかわり合いになったらたいへんだぞ）
そのくせ足は、吸いよせられるように人だかりの方へ動いた。大人たちの股ぐらをかき分けくぐりぬけ、駒三はおそるおそる奥の小部屋をのぞき込んだ。

一の二

少年はしたたか水を吐かされ、びしょぬれの衣類をぬがされて、赤ちゃけた畳の上にうつ向かされていた。
浪人者がその上に覆いかぶさり、背をさすりあげ、さすりおろしているので、うしろからでは少年の、むき出しの足しか見えない。青い炎をからませた備長の堅炭を、二つの七輪にあふれるほど盛りあげて、通路へかつぎ出してきた嘉助じいさんへ、
「子供をあたためるから、たらいに湯をとってくれ。ほんのぬるま湯だ。いきなり熱いのにつけると危ない」
てきぱき浪人は指図する……。
「あ、息をふきかえした。うまいもんだな」

「医者をよぶまでもないね」
処置の的確さに、やじ馬は声をあげ通しているが、浪人は無表情だった。意志的な、なかなか凜とした風貌の持ちぬしだが、眉間に深いたてじわを一本刻んでおり、それが顔だちから受ける印象を、ひどく陰欝なものにしていた。
ぬるま湯にひたされ、全身をやわらかく揉みほぐされているうちに、少年ははっきり意識をとりもどし、目をあけてあたりを見た。
同時に、すばやく状況を理解したのだろう、無遠慮にそそがれている幾つもの目から、自分の全裸をかくそうとし、両足をちぢめて起きあがりかけた。
「まだむりだ。もう少しじっとしておいで」
着ていた半纏をぬいでお関ばあさんが掛けてやるのを、さもきたならしそうに胸もとまで押しさげ、敵意のこもった目で少年はやじ馬を見廻した。
さくら色の、ほくろ一つ搔ききず一つない裸身の美しさにまして、少年の容貌はきわ立っていた。怒りを燃えたぎらせているその顔は、ひと塊りの白い焰さながら、静かな威と、気品にみちて、対する者を圧倒した。
「おい源さん、この子、どこかで見たことがありゃあしねえか？」
やじ馬の一人がつれに向かって言い出した。
「それなんだ。おれもさっきから首をひねっているんだが……」
「坊や。おめえ、どこの子で名は何というんだい？」
返事などしそうもない。
「そうだっ」
一人の口からとんきょうな声がはじけた。
「思い出したよ。こいつは海老蔵だ。成田屋のあととり息子だぜ」
「ちげえねえ。そっくりだ」
「まてよ、おい……。よく似てはいるけど訝しいじゃねえか。お乳母日傘で、ちょいと出るにも男衆の四、五人はひきつれて歩く大名題の息子がよ。この夜ふけ、一人ぼっちで川へはまりこむなんざ、なっとくのゆかねえ話じゃねえか」
「それもそうだ。舞台顔と素顔では、似てるようでもちがうからな」
「いや、海老蔵さんの素顔なら、私はよく存じてますよ」
口をはさんだのは嘉助じいさんだった。
「毎日、楽屋入りのたびに若い衆の肩車で、店の前を通りなさるからね。見まちがえっこありませんや。この坊は成田屋の海老蔵さんですよ」
「ほんとかあ、じいさん」
「なんなら念のために首実検をさせまさ。……そこらに十二、三の小僧がいるでしょ。成田屋の弟子ッ子だ。前へ出しておくんなさい」
逃げ出そうとした駒三の衿がみは、幾人もの手でつるしあげられ、前へ押し出された。
少年の、刺すような憎悪の視線が駒三を射ぬき、彼はす

くみあがって身をもがいた。
「ち、ちがうっ、この人は若親方じゃねえ。おらの知らねえ子だっ」
「およし、大根役者」
冷ややかな声で少年はきめつけた。
「口ではちがうと言ってるけど、お前の顔にはちゃんと『海老蔵でござい』って書いてあるじゃないか。へたな芝居はたくさんだよ。それより早く家へ帰って、着るものを取っといで」
ひ弱な、しかも驕った口ぶりが美貌をいっそう冴えさせ、不快どころか、逆に奇妙な、生理的な快感さえ人に与えた。魅せられ、気押されてやじ馬はどよめき、駒三は横っとびに往来へすっとんで行った。
嘉助は頭をふって、
「それにしても、いったいどうしたってこったい？　若太夫」
咎めるような目つきになった。
「うわさでは来年、三ノ替りの弥生狂言で、お前さんは八代目団十郎の名跡を、おやじさまから譲られるそうじゃないか。九ツや十の幼なさながら、さすがにお江戸の飾り海老、えらいもんだと、今から口々の評判だ。そんなたいせつな身体なのにうかうか水になど溺れてはご贔屓にすむまい。ご浪人が通り合せたからよかったようなものの、さもないと今ごろは大変なことになってたところだぜ」
「そういえば、どうしたい？　あの若いお武家……」
だれかが言い出し、
「いねえぞ。どこへ行っちまったんだ？」
せまい店の中はまた騒然となった。
濡れ身をふき、着物を着ていた、とまでは幾人もが目撃したが、いつ出て行ったのか、気づいた者は一人もいなかった。幼い妹まで消えてしまっている……。
「えらいもんだ。大名題のむすこを助けながら、一言の礼も聞かずに行っちまうなんてな」
「ぬかったぜ、じいさん。名前ぐらい、さきに訊いとけばよかったじゃねえか」
嘉助を責める者もいる。
ところへ成田屋の男衆が二人、馳けつけて来、ひと足おくれて仇めいた中年増の女房がはしりこんで来た。
「海老蔵はどこ？　うちの子はどこにいるんですッ？」
七代目団十郎の正妻、お澄であった。嘉助がうながした。
「こっちですよ、おかみさん」
人垣をかき分けて、小部屋の框にのめりつくなり、
「お前はまあ！」
ありったけの涙声を、母親は少年へあびせかけた。
「川へはまるなんて、なんてことなの？　姿が見えないので、手わけしてさがしているさいちゅうに駒三の報らせじゃないか。まさか、こんなところにいるなんて、おっ母さん、夢にも思わなかった！　なぜ一人で川岸など歩いていたんですっ？」
やじ馬はふえる一方である。男衆の一人が見かねてうな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

がした。
「ここじゃ何ですから、ともあれ若親方をうちへ……、ね、おかみさん」
そして框へにじりあがって、
「お召物でございますよ」
さし出すのを、ひったくりざまじかに裸にまといつけ、まるで、かぶれる木の下を走りぬけるような嫌悪の表情を露骨に見せながら、抱こうとする母親の手を避けて少年は突っ立つと、
「与四、帰るんだよっ、背中をお貸しっ」
かん高い声でいま一方の男衆を呼び立てた。

一の三

宮永直樹は家へ入ると、眠りこんでいる小菊の身体を、まず、そっと座敷のすみにおろした。
手ばしこく行燈をつけ、押し入れから花模様の小さな布団を出して敷くと、その上へ幼女を移して火鉢の埋み火を掻き起こした。鉄びんの湯が音をたてている。銅製の湯婆にそれをそそぎ、布でくるんで布団の裾に入れてやる動作は手なれていた。
このあと、納戸へはいって湿った着衣をすっかり着かえ、直樹はもどって幼女の枕もとに坐った。
しばらく無言のまま、その寝顔をみつめていたが、いきなり両手で顔を覆うと、
「劫罰だっ」
歯の根から揉み出すような悲痛な呻きを、彼はあげた。
「天の罰だっ、なんの罪も犯していないお前に……お前の眼に、報いがくるなんて……。ゆるしてくれ小菊っ」
風に触れた小枝さながら、かすかな音が表でした。だれかが指で、軽く戸をたたいたのである。
「宮永さん。もどっておいでですかい？　弥平次だが……」
「ただいまあけます」
玄関の錠を直樹ははずした。にぶい軒灯を背にうけて、隣人の全身はくろぐろと戸口を塞いでいるように見えた。
「茶がはいったのでね。さそいに来たんです」
直樹の表情にためらいが走った。弥平次の語気にはしかし、低いが、有無を言わさない力があった。
「うかがいます。裏から廻りますから……」
ことわって、いったん座敷へもどり、行燈の灯芯を細めて直樹は左どなりの弥平次の家へ行った。同じ三間きりの貸家づくりだが、小庭のついた一軒建ちばかり五世帯ほど並んだうちのひとつで、豊かではないが、だれもが小ざっぱりと住みついている一劃である。
弥平次は三十四、五――。
妻に死なれたとかで、三日に一度、かよいの老婆をたのむほかは気らくな一人ぐらしをつづけてい、商売は錺職人ということであった。今戸の細工場で仕事をしているため昼間はほとんど家にいない。挙措も言葉つきも落ちついた、年よりははるかに老成して見える男だが、どうかする

とその眼の奥を、ぞっとするほどするどい、酷薄な光りがよぎることがあった。
「およびたてするほどのことではねえんですがね。知りあいの快気祝いに塩瀬のまんじゅう切手をもらったもんで、今日、伝馬町へ用たしに行ったついでに、品物と引きかえて来たんです」
潔癖な性分とみえて、桑の茶だんす、長火鉢……ひと通りそろっている家財道具は、どれもこくめいに艶布巾がかけられていたし、いつ来ても家の中は気持よく整頓されていた。
猫板の上の杉箱へ、目をそそいで、
「ふうがわりなまんじゅうですね」
直樹は気のない口ぶりで言った。
「朧まんじゅうってやつでさ。蒸しあげてからさらにひとへぎ、表っ皮をむいたわけです。『栄耀は餅の皮』って言うが、江戸っ子の舌もぜいたくになったもんじゃありませんか。――さあ、つまんでください」
香りのよい煎茶を二つの湯呑みにつぎ分けながら、
「あんたのその、顔つきを見れば、もう今さら訊くだけヤボってことになりそうだけれども……。やっぱりいけませんでしたかい？　小菊ちゃんの目」
いたわりのこもった語調で弥平次はたずねた。
「治療の方法はないと言われました。最後の望みも絶えたわけです」
「ふうん」
「蘭法の、それも眼科では当代一と折り紙つきの医師からそう宣告されたのですから……。あきらめるほかなさそうです」
「あんたもしかし、よく尽くしなすったよ宮永さん。江戸へ出て小一年になるというこったが、目医者という目医者をかけずり廻ったじゃねえか。灸も針も、祈祷まじないまで、目に効くと聞けばあの子をおぶってとんで行きなすった。とどのつまり駄目だったにしろ、それを思えば得心もゆくわけですよ」
「田舎にはろくな医者がいなかったので……」
「金もずいぶん使いなすったろう。寺小屋師匠の収入だけではやれるもんじゃねえ。貯えをお持ちなのだろうけれども、妹さん思いなお人だ、出来ねえこったと、近所では感心してますぜ」
「……」
「いったい何がもとで、小菊ちゃんは失明などしたんですかね？」
「私にもわからないのです。ある朝、急に目の前が暗いと言い出して……。そのときは美濃の河渡にいたのですが……」
言いかけて直樹はうろたえ、すばやい視線を弥平次の横顔に走らせた。相手は無心に、まんじゅうを口へはこんでいる……。直樹はつづけた。
「とにかくすぐ、医師に見せたのですがわかりません。江戸での診たてもまちまちでしたが、今日の蘭法医は、眼底

の膜がはがれて、そこへ血が流れこんだためだろうと言っていました」
「どうしてまた、そんな難儀なことになったのだろう」
「火事、地震というような珍事がおこって、夢中で二階からとびおりる……、あるいは頭を強打するといったことが原因で、膜ははがれるのだそうですが、妹ぐらいの幼年で衝撃もうけずにこのような症状が起こるなどという不幸な例は、めずらしいと言うことでした」
「運がわるかったんだなあ」
「罰です」
「え？」
「いや……、前世の因縁とやらでしょうな」
鉄びんをおろし、たばこ入れをとり出して一服ふかぶかと吸いつけながら、わずかの間、煙のゆくえを目で追っていたが、ふいに声をひそめると、
「先生」
弥平次はあやすような調子で呼びかけた。
「あんた、かくしごとをしていなさるね」
「！」
「小菊ちゃんのことですよ。あの子は妹じゃない。あんたの娘でしょう」
直樹の顔から血のけがひいた。
「どうしてそれを……」
「なあに、勘でさ。だいいち年がはなれすぎている。長兄と末妹――。ない例じゃねえが、宮永さん、あんたの、小菊ちゃんへの対し方は兄のものじゃねえ、父親が子に見せる打ちこみ方ですよ」
ほろにがく直樹は笑った。
「可笑しいですかい？」
「いいえ、宮永さんになったり先生になったり、いろいろ呼び名をお変えになるから……」
「と、一応はぐらかすか」
「べつにはぐらかすわけではありません」
「いいのさ。人間はだれでも、人に言えねえ秘密を持っている。あんたの過去をあなぐりたててえために、こんなことを言い出したわけじゃねえんですよ」
「わかっています。……が、私もまた、自分の犯した罪悪をしいて人に隠して、指弾や身の危険をのがれようとは思っていません。問われなかったからこそ今まであなたに打ちあけなかったまでで、お察しの通り小菊は私の子です。嫂と密通して生ませた不義の子なのです」
「なるほど」
さりげなく、弥平次はたばこ盆をひきよせ、煙管の灰をこつりと落とした。
「しかも密通が露見して、嫂と国もとを出奔するさい、妨げようとした兄に私は重傷を負わせました。腰の筋を斬られたために、兄は一生、足の立たぬ不具者になったということです」
諸国を流浪し、河渡の町で小菊を生んだあと、産後の肥立ちをこじらせて嫂は死んだ。そして、小菊が三歳になっ

た年、その失明を機会に江戸へ出てきたのだと、平板な声で直樹は語った。呵責があまりに重いため、かえって感情の起伏をうしなったかと思うつろな話し方であった。

「いやなことを思い出させてすまなかった。念を入れるまでもねえが、今夜の話はこれっきり忘れることにします。口が腐っても人にはしゃべりませんぜ」

と弥平次は言った。

「いや、かまわないのですよ弥平次さん。虚勢ではなく、私はいつ何どきでも兄の復讐をうける気なのです。偽名も、ですから用いてはいません。兄の長男は今年十四歳ですが、おそらく元服をすますとすぐ、私を求めて国もとを旅立つでしょう。親類が後見し、同道してくるとすれば、私の命はその日までです。逃げかくれする気などすこしもありません」

「それはしかし、ばか正直すぎはしねえかな。あんたにもしものことがあったら、小菊ちゃんはどうします？」

直樹の表情がゆがんだ。痛みにでも襲われたようにはげしく眉をしかめたが、声つきは静かに、ゆっくりと言った。

「盲目のまま生きる悲惨さと、死と、あの子にとって、どちらが幸せでしょうか。……発見すると即座に、刺客たちは私を斬るか、あるいはひっ捕えて国もとへ送り、兄の手でなぶり殺しにさせるか、そこはわかりません。しかし小菊だけは容赦なく、その場で斬ると思います。兄の意志です。私の知っているそれが兄という人の性格なのです」

かぼそい、たえだえな泣き声がどこからか聞こえた。地の底でかなでる音楽のような、それは非現実的な哀調で二人の耳をとらえた。

「目をさましたようです」

湯呑みを、直樹は盆へもどした。

「ごちそうさまになりました。おいとまします」

「あしたのお目ざに、持っていっておやりなさい」

五ツ六ツ、半紙に包んでよこした朧まんじゅうを、片手にかかえて戸口を出しなに、

「降ってきました。……雪ですよ」

庇を見あげて、直樹は小さくつぶやいた。

一の四

二寸ほどつもって雪はやみ、あくる朝は薄日がさして、表通りははやくもぬかるみはじめた。

朝餉の膳ごしらえをした直樹が、小菊にそれをやしなってやっているところへ、庭さきから、

「おはよう。先生うちですかい？」

差配の利兵衛が廻りこんで来た。よほど急いで歩いたとみえて、太織の羽織の背にまで雪泥をはねあげている。

直樹を見るなり相好をくずして、

「あんた、えらいことをやらかしなすったねえ先生。ゆんべ、永代の河岸っぷちで子供を助けなすったんだって？

家の者が訪ねて来てますぜ。それはいいが、助けた相手がすごいや。お江戸の飾り海老だってえんだからね。わっしは団十郎のえらい贔屓でね。まあ、ちょっくらそのままでいておくんなさい。表木戸の番小屋に使いの者を待たせてあります。すぐつれて来ますから……」

一人でしゃべり、一人で呑みこんで引っ返して行ったが、まもなく中年の、凝った身なりをした町人と、町内の蔦頭と見える男を案内して、そそくさもどって来た。

「こちらでございますよ太夫元さん。宮永直樹さんとおっしゃってね、手習師匠をしていなさるかたでございます」

「おはつにお目にかかります。わたくしは河原崎座の座がしらを勤めております河原崎権之助と申す者で、昨夜、危ういところをお救いいただきました小せがれの親元とは、親戚すじに当っております」

脂の浮いた固ぶとりの赫ら顔を、いちめん愛想笑いの渦にして町人は名のった。

「いったい、なぜ……」

直樹はどもった。

「なぜ私ということがわかったのです？」

「先生あんた、一件さいちゅう小菊ちゃんを、そば屋にあずけなすったでしょう」

ひきとって利兵衛が説明した。

「成田屋んとこの弟子小僧がそばを食ってて、ふたこと三こと小菊ちゃんと話をしたんだそうですよ。『おうちは今川町』といったのを小僧が小耳にはさんでいたのと、そら、小菊ちゃんの目がね、あれでしょう。で、そういう妹さんを持つ若いご浪人ということで、町役のところへ問い合せが来、こりゃ宮永先生にまちがいないと見当がついたわけなんでさ」

「何はともあれ、さっそく親どもが参上すべきなのでございますが、団十郎はただいま市村座の顔見世興行に出勤中……。母親は女のことではあり、とりあえず私がご挨拶にうかがいました次第で、もしお手すきでございましたら、今夕、門前仲町の料亭『はま村』までお越しをいただき、一献さしあげながら御礼を申しのべ、また、お近かづきにもならせていただきたいと、かように団十郎が申しております」

「せっかくですが……」

直樹はかぶりをふった。

「そんなお心づかいは無用です。当り前なことをしただけなのですから……」

利兵衛があわててさえぎった。

「もったいねえことを言いなさんな先生。天下の団十郎に招かれたんですぜ。代れるものならあっしが代りてえくれえだ。話のたねだと思って行ってらっしゃいまし」

「差配さんの言う通りだと思いますね」

と、このとき、垣根の外から声を投げて来たのは、隣家の弥平次である。今戸の仕事場へ出かけるところらしい。

「招きをことわったりすれば評判はますます高くなる。奉行所に呼び出されて、ご褒美に青ざし五貫文——というよ

うなことになると、かえって、しちめんどうですぜ宮永さん」
直樹の表情がわずかに動いた。
「なるほど。奉行所ですか……」
彼はうなずいた。
「おっしゃる通りかもしれない。それではその、『はま村』とやらに伺うことにしましょう」
「ありがとうございます。成田屋夫妻もどんなによろこぶか知れません。では夕七ツ、このよ組の頭に駕籠でお迎えにあがらせます。どうぞ御ふだん着のまま、気がるにお越しくださいまし」
言い置いて二人の客は帰り、利兵衛や弥平次も去ったあと、入れちがいのにぎやかさで手習い子たちが集まりはじめた。今日はことし最後の稽古なのである。
昼すぎにそれも終り、子供たちの手で重ねられた手習い机を、もう一度とりおろして、こびりついている墨のよごれを拭きとっているところへ、差配の老妻がやって来た。
床屋へゆき銭湯にも寄ってめかしてこいと、うるさく責めたてる。直樹はさからわず、言われた通りにしてもどると、こんどは着て行くものの世話をやき出した。紋服に平織りの袴……。それらを身につけ終った直後、駕頭につきそわれて駕籠が来た。
『はま村』の玄関式台には、河原崎権之助をはじめ芝居関係者と見える男たち三、四名、女将や女中まで入りまじって仰々しく出迎えていた。
通されたのは奥まった五十畳ほどの広間で、左右にずらっと人が居ながれてい、直樹の席は金屏風を背にした正面、上座にしつらえられてあった。
淡い悔いに、彼は包まれた。こんな派手々々しいことになろうとは、予想していなかったのである。
権之助が直樹を、七代目市川団十郎とその妻澄にひきあわせ、あらためて夫婦の口から鄭重な謝意がのべられた。団十郎は中高な、きわだって目の大きい、ひきむすんだ唇もとに尊傲さのほの見える典型的な役者顔の持ちぬしだが、妻女は愛くるしく、眉の剃りあとなどほんのり匂い立つような、華奢なあだめいた感じの女であった。
名も住居もつげず、救った相手の穿鑿さえせずに立ち去った直樹の、恬淡さへの賞讃が、団十郎の口から誇張して述べられたが、芝居を知らない彼の耳にも、そのひと言ひと言はあまりにも流暢すぎて、舞台の口上でも聞くように空疎にひびいた。
「おや、海老蔵はどこ？」
澄がうろたえてあたりを見廻した。
「かんじんのあの子がお礼を申しあげなくては、なんにもなりません。どこへ行ったのです？」
「はて、今まで私のわきにいたのに……。だれか大いそぎでさがして来ておくれ」
権之助の声に女中や男衆が散ってゆき、このまに白木の目録台が、うやうやしく直樹の前へはこばれてきた。団十

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.